

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2024. 8



令和6年8月1日発行(毎月1回1日発行)第72巻第8号

No.795

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下してまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来、ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二四年 八月号 (通巻七九五号)

◇今月の二十首詠……つくし

市原やよひ 2

■作品

牧 雄彦・松浦禎子他 4

A 牧野君代他 18

B 宮原宏行他 44

C 間野春美他 55

A 来栖万佐子他 68

■オリープ集

酒井 牧・杉浦詩子他 36

◇今月の二人

長谷良恵・岩野美代子 14

私と短歌との出会い (264)

木村恵子 17

■〈第一歌集を脱む〉17

船田清子歌集『藍の刻』

—志ありて人生豊か—

辻田聡美

■鑑賞・三好直太の歌 13

〈緩の面〉

久我田鶴子 34

◇シルクロード・カフェ

【責任編集】

木村文子 42

■遊覧寄港〈母たちの願い〉

杉本直美 32

■歌壇月旦

木下A Iの歌

西堤啓子 33

現代歌人協会主催・公開講座 聴講報告

玉井綾子 35

■六月号作品批評

A……………柴田登志恵・山野幸司

光広祥子・梅本武義

B……………沖田誠子・島根美智子

C……………小野雅子

オリープ集……………近藤芳仙

今月の二人・作品評

久我田鶴子 16

最近の歌誌より

〔編集部〕 78

クリップ……………79

神田通信……………80

写真歌合わせ・作品募集……………表3

(表紙デザイン) Taruko Kuga

つくし

市原やよひ

昭和十二年生まれ。
萬春の会所属。

夫逝きて二人の自分居るような夢と現を行き交い生きる

この一字どうしようかと聞いてみる写真の夫は頬笑むばかり

返事なき会話成立していると話し続ける生ある如く

在りし日のままの書齋にパソコンは主の顔して部屋を支配す

夫の居ぬ椅子は寂しげ幻と私を乗せてぐるりと回す

米寿祝ぎダイヤモンド婚も祝われしと己れ慰む術の一つに

「みんなコロナが悪いの」言い放つ人も悲しみの中を漂う

春くれば命それぞれ吹き返す草の芽さえ愛しきものを

車椅子になりてもつくし摘む春を待ち居し夫よ 春になりたり

野に出でて楽しげなる夫思いつつ一人し探す名残りのつくし

はかま取るはあなたの役目黙黙とただ黙黙と取りし姿や

お天氣に連動している気分にて今日は曇り日奈落の底に

手際よくと考えなくていいんだよ一人のごはん作るだけだから

決まりごとのように舞いいる蝶二つ一畝のみのキャベツの上を

夫の写真携え孫のコンサートこれが最後の発表会と

ドラム打つ手が激しく踊ってる一緒に夫の写真も踊る

朝ごとに七種を確かめ飲む薬時にはゲームしているように

この薬いつまで管理出来るかな朝の光は鋭く差せり

老の字を避けつつ老の字に手が伸びてゆく図書館の棚

小さき花一つ一つに寄り道し蜂は飛び立つ春の陽の中

作品

A

牧 雄彦

木曾駒ヶ岳

・大

信濃路は春真つ盛り一斉に桜、ハナモモ、辛夷も咲きて
 伊那谷に花満ち溢れ赤、白、黄、明るき色が村を埋めたり
 この山は陣馬形山と子は説くを聞きつつ人住む下界を見放く
 雪原に春の日差してつばめ舞ふ四月の木曾駒千疊歌カール
 はるばると南の国より飛び来しか若きつばめが雪原を舞ふ
 千疊歌カールゆ見下ろす町並みは天竜川に沿ひて光れり
 冬山の装備身につけ子は発ちて雪溪はるかに点となりゆく

松浦 禎子

五月吉日

・羊

ガン告知うけて術後の十数年痛しかゆしもなく生きており
 米寿すぎこの先のいのち数うとき全きひとりの心をいだけ
 思い出の中にし生くる人々と夜ことの夢に微笑みて語らう
 手術後のわが快復へのほうびにと子より受けたりイタリーの旅
 痛む足・腰もおのずと癒えゆくにみ寺参りのみちのり遠く
 あなたの笑顔よしとほめられ相まみゆ久かたぶりの五月吉日
 湘南台の駅を降りきて歩は弾むわれを待つひと住む家までを

松本多摩子

半世紀

・桜

縁ありて義姉と呼びたる半世紀葬儀の席に溢れる想い
 親族の揃いて義姉の骨上げは膝のチタンが黒々残りぬ
 雑草は抜かねば花咲き種つける暑さに向かいて競う季節に
 父母もこうだったのか老いの坂未知の人生恐れておりぬ
 久し振り散歩の犬に娘にも待たれる悲哀噛みしめて嗚呼
 錆びた鍵せずに盗られし悔いの中歩いてどこまで歩数の増える
 美しき虹を見たとの娘のラインふるさと一日強風の中

三浦 好博

今しばし

・銃

ホトトギスの裂く声この世を過ぎて行く今しばし我に不幸は来るな
 世論とふ常識徐々に為さるれど老いの抵抗が平和を保つ
 軍靴とふ言葉を知るは我らまで子らはたやすく軍備を語る
 生真面目なああの友も早や逝きにけりエープリルフル本気で怒り
 お互ひに歳ですなあと認めあふお悔やみ欄を必ず見てる
 殴られて気絶させられ手術とふ麻酔なき昔思ひてもみよ
 大谷にホームラン出るのも良かれども能登の現状も追ひかけて呉れ

三木 まり 通

・昂

軒下の燕のつがい睦まじく巢をのぞいては尾がタップする
吹き過ぎる薫風 よく会う青年に風の名前を尋ねてみたい
そら豆が並ぶ畑の彼方まで空の旅びと風吹き渡る
風の絵を描くように形変え雲流れゆく五月のあした
屋根裏に小さな足音スタッカート仔猫のいのち健やかにあれ
そら耳の亡き父の声降ってくる梅雨入り前の空が高い
蜥蜴の背背く光れば遙か遙か空の彼方に風鳴る五月

宮本 靖彦

六月五日

・俊

扉を越え忍びて入りし爺の庭鳴く鶯の姿見たくて
六月五日満七十九年の戦災日死者とも伏せし電車道のこゝろ
神戸工専焼跡に建つ五百軒板張りの壁板登きの屋根
進駐軍チヨコ、アメ、コーラ、ブギの歌朝ドラに蘇る焼跡神戸
青年団主催焼跡盆踊り炭坑節に活気も戻る
板張りの復興住宅ブギ唄へば隣の兄妹板壁叩く
八歳も下の従弟の葬にゆく青空神戸思ひ出の街

三好 聖三

樞樓

・伊

湧くように黄花コスモス芽吹きたり耕す余地を残さぬほどに
ともどちと畑に遇えば四方山の話は時に政治にいたる
難民と避難民とは違うという。これが日本のもてなしである
千匹の猫と暮らせば気がふれることだつてあるさ ときには
どこへゆくフレッドの家「ギフトテッド」のね右目の無い大人しい猫さ
檻樓じゃないじゃ今日とは姐さんが言う畑掃りのわたくしに向き
海を見て俄にこゝろ解けたり山河をめぐる旅の終わりに

御代田 澄江

オーロラ出現

・茨

この国はまるで悪事のオンパレード外交官盜擄国立病院患者虐待
憲法記念日赤飯炊きて仏に供へ平和を祈る戦止ましめよ
紫深く咲くクレマチス持ちくれし友天国より見えていますか
黒糖に卵と粉混ぜサターアンダーギー沖繩の味は優しく深い
納豆をかき混ぜ食す消費県ランキングとふに真獻せしか
新聞読み見るテレビ欄にチェック入れ切り書きと耽溺の時
太陽のフレア一吹き磁気嵐オーロラ出現し地球の機器危機

もとむらしげと

小さき夢

・そ

小さき夢いくつ叶えて来しならむ三色すみれわが庭に咲く
密やかに生きて静かに死にゆける人こそ理想われ若きより
午前四時に名を呼びあいて握手する妻の手温く我を包める
雲間より冬の光のこぼれくる汚れし臍腑をさらしてもみよ
大輪の花にはあらずひそと咲く花のごときかちははの生
農夫として終わりし父母の傍らに我の小さき位牌を置かむ
母さんの遺しし猫を日に一度抱きしめてはいる御やりしの子

桃原 佳子

一週間

・沖

目覚ましに急かされる朝じつと耐えつつ日課となりし体操始む
朝空に一番飛行機雲を引くりハビリ通院一日始まる
さえずりの大きくなつた通院路上着一枚余分と気付く
熟れ麦の横に水稲のおおとおと伸び田植えを待てり
好天の田起し作業の捗れり気温三十一度夏日のつづく
身の丈に合うこと為して心ゆくまで生きゆかんゴーヤの種蒔く
慌しく一週間は過ぎ去りぬ通院と家事に明け暮れる日々

山下雅子

ひまわり

・習

音もなく雨降り出せり葉ざくらを包みしつとりねぎらうことし
 ミニひまわりされどひまわり一りんに暗きコーナーほのほの明かし
 見るほどに金の油の一しづく欲しとふれたり黄の輝きに
 ウクライナの国花ひまわり戦場となれる大地を黄に染めて咲け
 この夏はかなかなの声聞きたきに去年の異変をふと思ひおり
 リハビリの片足立ちは易からず平行棒に守られながら
 まとまらぬ心残りをそのままに令和の一日今日も暮れゆく

山野幸司

トラクター

・沖

ゴーゴーと田んぼ鋤き行くトラクターまだ終わらないガザ・ウクライナ
 草刈機進む田んぼに散り散りに破片赤々暮れなずみたり
 大型のわがトラクター今年からこれで行くぞとエンジンふかす
 一反の田んぼ鋤きゆくトラクターエンジン音にかわず飛び出す
 トラクター囲み漁る鳥達のおだやかに住み分くる様平和の形
 トラクターどっかとするる運転席天下太平わが手の内に
 屋根付きのトラクター持つ高級車乗った気分て田の中にある

山本

孟

生きねばならぬ

・大

生活から出る生ゴミを捨ててに行く余力大事に生きねばならぬ
 華やかな俳優たりし同じ年独り静かに余生を送る
 老衰の死にいたるまで短歌を詠み本読み尽くす命でありたし
 聞くしりから忘れる脳の老い深し命の限り物忘れ続く
 動乱の昭和を生きて長のわれ母の手伝ひ弟妹の世話
 カーテンをさっと開けば五月晴れ光に触れてまぶしくしみる
 大窓に朝日差しこむ連休も減塩食を温め食す

養学登志子

木の芽のしずく

・竣

小鳥には木の芽のしずく旨からむ羽ひとつ振りも一度ふふむ
 この小さき小さきこの身の身の曲りちりめんじゃこの目ひとつ命の
 蛹となり揚羽となりしと少年来 柚子坊の小枝わたせる夏の日
 今朝めざめ揚羽二匹が部屋内をとんでて思わず母を呼びしと
 しかじかやそう言う訳の柚子坊の礼とうお菓子よきお茶を汲まん
 だめだめだめだからねと医師の言い誘眠剤とはそんなにわるいの
 真夜三時見廻りに来し看護師さん錠剤半分「先生から」と

横田敏子

肩パット

・福

さりげなくペットボトルを開けくれし人あり歌の勉強会に
 土曜日の朝餉とりつつ聴いているラジオの「山カフェ」 山へ行きたい
 山開きに毎年登りし安達太良山今朝も眺めたりあこがれの山
 沈みゆく夕日の差して反射する斜め向かいの家の西窓
 断捨離と並べて置けるプラウスやセーター、ジャケットに付く肩パット
 義姉さまは昔美人のなで肩で肩パット付きの服がお似合い
 どの服も肩怒らせておりし理由 単なるファッション? 女性の自律?

磯田ひさ子

黄蘗

・森

見の限りみどりの木々に身を置けば一本の木になれる気がする
 唐松の林の中より伸びあがる紛れ込みたる赤きクレイン
 浅間より奔りし熔岩のかたまりを積みて鈍色の地境となす
 昔よりいきましたといふ顔をして帰化せし黄蘗黄の花垂らす
 生くるべき場所は自つと定まりて池のほとりに黄蘗蒲群るる
 小鶏のときをり鳴くを聞きとむるいとまを得たり半世紀経て
 木の間より射しくる光揺らきつつわがからつぽの胸に沈みぬ

市原やよひ

桐の花

・萬

奥田陽子

閉店

・羊

むらさきに散り敷かれたる桐の花森林公園の中なる道に
道塞く桐の花に戸惑えどいつか物語りの主人公めきて
むらさきの花の主を知りたくて見上げたる木に桐の木あらず
噎せ返る程の新緑に包まれてみどりの空吸ったのはいつ
公園の道は坂道山登りの真似事めきて歩を止む幾度
神経質に僅かな坂に反応す今さらに知る身の衰えを
新緑に囲まれるのはここまでか坂道限界撤退とせり

梅本武義

腫瘍

・羊

小野雅子

五月

・羊

老いたると言いし疲れが症状と検査結果の腫瘍に思う
腫瘍とはいえまだ初期と深刻にならずにおれどしだいに気重し
偶然と思いはすれど下がり来し蜘蛛を許さず入院前夜
一夜にてわが身より出し一袋 血に染まる尿赤ワインに似る
手術後をベッドに動けず点滴を見つつ思えりガザの恐怖を
わが老躯新看護師の実習に供され下半身洗われており
病室の端から端が十歩にて五百歩目指しリハビリをする

大浪美雪

遅速

・森

神田鈴子

五月

・大

先延ばし先延ばしして換気扇おのれをなだめ洗洗はづす
切つ先で刺したる指をしばらくは口にくはへて深呼吸せし
「ととしか」と肩をしかめる亡母の声だつてと言ひ訳け子に戻るわれ
数字より解放されて畑に出づ耕す鴈をみみずも踊る
風になびくつばなの穂先に遅速あり傾けるもの直ぐ立てるもの
電線に並ぶ碍子は音符のやう募る風に何を奏でん
募る風順と受けたる発電用風車の回る気を込め回る

夕空を映す出窓の高だかとそのみ長く暮れのこりいる
閉店に近きちいさき店を知る驚かねども胸にひびきて
交流のこまやかなりし小店舗人影いつよりまばらとなりし
賑わえる熱帯魚店に近くして店を閉じたり長くありしを
去年今年うち続きたる閉店のこの通りなり人は過ぎゆく
閉店の花舗の脇道小さくもあまたの薔薇の花をつけたり
咲きのほり夢のような立葵児の指す方に夏は近づく

くれなるの堤となりてつつ咲く五十年超すわが住む団地
雪解けの水辺にちかき露の臺のみどりを愛でし幼きわれよ
新しき教科書ひらく気分にて新着の歌誌の表紙に折り目
小学校から太鼓の音のきこえる運動会の練習 五月
大事さうに赤きカーネーション持ちてゐる若き男のやはらかき頬
若れば暑く脱げば寒い季節きて急に「湿度」が見えはじめたり
亡き友に貰ひしセリーヌのスカーフを落としぬ ただの思ひ出となる
呀えざえと庭のみどりの光る朝こころに透るウグヒスの声
紫陽花の葉はのびやかに茂りたり白き蕾をあまた抱きて
ノイバラの白、くれなるのバラ咲きて豊かな香りが漂ふま昼
むらさきの小さき蝶の舞ひ出でぬ迷へるわれに翔べとばかりに
母の日にそれぞれ思ひを届けくる二人の息子の手の中にある
腰痛に悩まされつつ生くる日々平均超ゆる骨密度なるに
人々の苦しみを食ひ止めむとする停戦案の受け入れを待つ

上林節江 祭り

・湾

朝空に花火とどろき和太鼓のドンドンコドコ心うき立つ
 法被きる外国人にかこまれて常住む町が国際化する
 歩く力あるを羨しみほこほこと神輿につらなる商店街を
 おもさしのよく似る母子が扇子ふりわが前を眺ねる雀踊りに
 ひらひらと団扇をふりてわれもまた祭囃子にとけこむひと日
 見知る人ひとりもなくて祭り終え寂しいようなほっとするよな
 八千歩こす万歩計はずみたる心をたしてきよう一万歩

菊地栄子

春めきて

・海

春めきて番の小鳥おちこちに追いつ追われつ決してくもあり
 小鳥らが埒に帰る常緑樹今宵は風をはらみて揺らぐ
 昨日とは同じにあらず伐られたる梅の木あかき樹液をさらす
 剪定されたる恨みのごとくボケットにカナメの背き一葉が入る
 心地よく頬に潤う春来たれ朝々冷たきクリームが沁む
 鳥帰る二月のうつつ郊外の田んぼに無言に群れいる鴉
 滑らかに会話に入れぬもどかしさ加齢と言うも華麗にあらず

草刈十郎

桜吹雪

・世

大震災の惨状目にし思ふなり手加減知らぬ自然の脅威
 世事忘れとりとめもなき話して日向ほこする老いらの平和
 三十年五十年後を語りるる死など微塵もなき若きらよ
 ことばにははまだなりきれぬ声あげて桜吹雪のなかのみどり児
 冬將軍去りて嬉しや万雷の弾けることき花日和なり
 砂時計立つればさらさら降り積もる過去といふ名の戻らぬ時間
 透明な風の子遊ぶやわが窓ゆ見ゆる向かひの木立揺れをり

河野繁子

虹

・雁

リハビリの人の集まる大広間そばの林に小鳥の遊ぶ
 爪を切り髪をそり終え別れしに夫を襲えりコロナウイルス
 高熱に意識うしない延命の治療するかと問われ息のむ
 身がわりにもなれずウイルス陰性の我は外より見るほかは無き
 死に瀕す人を小窓に眺めおり家族三人肩を寄せあう
 熱下がり言葉の出でしと知らせあり我はベッドで天井仰ぐ
 たまりたる涙のなかに虹うまれ心癒して流れてゆきぬ

小林能子

三十年をへぬ

・羊

誰かれの縁偲びつつ家族旅「むつ」訪ぬゆき三十年をへぬ
 栄光の「むつ」放射線漏れショック原子力の安全神話砕きぬ
 赤ん坊が嬰兒籠で母を待つまひる座敷童子の歌ふ手毬唄
 いまここに置きし時計の見えざるも日暮れて座敷童子の悪戯
 座敷童子の悪戯に物の見えかくれ視野狭窄とわれは気づかず
 高齢者施設を探しもうとが午後の時間の短さを言ふ
 夏近き海辺の風は旭村のメロンに緑の網目ほどこす

近藤栄昭

送り盆

・虹

送り盆海へに線香萩の花家々集まる浜砂の湿り
 山風の吹く夕方に精霊ぶね沖へ押しゆく日焼けの子供ら
 打ち返すさざ波の際引き波に供物押しやる子おらぬ家は
 和尚さん線香あげて誦経するお鈴の響き沖へ夕暮れ
 日の沈む水平線は西方と夕日垂れ行く盆の終わりに
 涼かぜに盆が終われば秋となる海に入れず毒クラゲ来て
 山風に乗り来て浜で刺すやぶ蚊いずこへゆくか沖に消えゆく

近藤芳仙

春物語

・信

図書館の蝟梅がまづ春の陽を吸ひて黄色の染をかんでる
雪消水ながるる音がつれてくる信濃の春よ少しあかりて
膝すこし痛むのみにて健やかに今年の畑に鍬を入れたり
ぼこぼこ青空にうく雲見えて気安く人に話したき午後
今月の歌稿つかずと電話して病み深みたる君につながら
身の巡りおほつかなしといふ君の家居はつづく愛猫にこたはり
水にのり何処へ流れゆくものか笹のわくら葉やがて消えたり

坂上直美

メリー・ウィドウ

・天

春なのにや春だからか世間には暗いニュースが日々満ちあふれ
一生を二百五十万で売っちゃった子役だった子可愛い子だった
二人して桜の花を見ていたの気づくとあなたは消えてしまつてた
もういいかいもういいかいねえ出てきてよ消えてしまつたわたしのあの子
さよならという言葉さえないままに一人で逝つたわたしのあなた
嘆く人悲しむ人にも春は来るツツピツツピ生きている楽しい
金はない亭主はいない時間だけたつぷりとある楽しく生きよう

坂出裕子

苔

・洛

石段を上り来たりて仰ぎ見る五重の塔の高く美し
杉苔のみどり明るき寺庭を座して眺むる子と二人来て
日常を忘れて憩ふ山の上みどり萌え立ついのちかがやく
新しき畳すがしき大広間つつしみ拝むみほとけの像
つつがなく子とここに在るしあはせを誰に謝すべきただ有難し
振り返り見れば長かる人生の過ぎ来しはるか夢のごとしも
しあはせの時を給ひし御仏をふり返り見て寺をあとにす

佐藤道子

異変

・甲

横文字の造詣の多き新聞にとまどひてをり昭和生まれは
マンションの屋上に鳥が集まりて会議なすらし寒き朝に
今会議終へしか鳥次々に飛び立ちてゆく冬の大家
高く高く鳥は飛び何を見て何を話すや人にはわからず
クリスマスローズ三月までと書にあるを五月半ばも花咲きつづく
二月より咲き始めたる時計草五月真盛り白く輝く
風寒き二月なりしが見上ぐれば真宵に暗れて夏の大家

篠原まり子

歳月

・羊

石山寺訪ねしは何時ゆくりなく大河ドラマのシーン懐かし
葉桜の下でゆく春惜しみつつやがて来る危機夏日恐るる
鉢植えのブライダルベルの花粒を濡らす雨こそ清しきものよ
小さき地銀目覚める真夜にハンガアのシャツに付く猫ゆっくり動く
可愛さに変わりあらねど不可解なクロインペットのじゃれ合うさまは
肩に乗る小さきものを失えば体の一部失いしまま
ひい孫を抱く腕さえ頼りなく未知なる歳月思い及ばず

柴田登志恵

ほとけ

・天

うすべにに人影たたしめ遊びやせむ遊びやせむとぞ花降りしきる
樹のいのち湧き立つままに彫りあげし円空のほとけ整跡するとき
何ひとつなせぬわが身を憤り円空彫りし祈りのほとけ
相容れぬゆゑに愛しき円空の両面宿儺いのち愛しき
円空のほとけにまみえ三度目の手術へこころの姿勢を正せし
仮寝から目覚めし猫の伸びおほき待ち惚けなど忘れぬらし
円空のほとけ求むる旅に出ていくたびの春とほりすぎけり

鈴木結志 礼記

・福

生きてゐる限りふでとる執念に至誠一貫書の技をねる
 今上の生きとは言わじふでとりて今日ある生きをこよなく満たす
 ふでとれば「まてい」の精神よみがえる一途こころに書芸見出す
 みずからのうたも修羅場もなじみたれば趣味のまほろば楽しきものを
 ふで文字の一景呼び名書にかわる表現とはかく美字を教う
 天に満ちる輻射のあかり理論づけこよなく満たす夏の星空
 書の一途永存満たす生き力こころを正す礼記に及ぶ

関根榮子 吉祥草

・埼

親しげに見知らぬ人と話す夢この頃旅せぬわれかとおもう
 わが駅に快速電車止まらざりたまに乗り越す旅人のこと
 良きことのあれば咲くとう吉祥草さしたることなく今年も咲けり
 マンションの隣に一軒残りたる昭和の名残りの小さき平屋
 北上の高速道の音ひびくこの野の螢絶えて久しき
 小松菜の花も菜の花咲くままにひとむらあれば種子を結ぶか
 老いの日々の速く過ぎるは変化なく新しきことも起こらぬゆえとぞ

関根和美 S邸のバラ

・埼

保存樹の札もつ木々を借景に陰影ふかくバラ咲きほこる
 とりどりの色を散らせる花がらを眼らす木箱樹間にたたずむ
 歳月を重ねる白き壁に映え蔵にも意外と似合うバラかも
 紫のまた桃色の宿根草グラデーションの妙を生かして
 みーちゃんと会えたることにほほえめば君も大きなほほえみ返す
 バラの名もその特性も明確に記憶する友わかかえりたる
 カントリースタイルこんなに似合う人だったS氏は夫と同齡の友

高尾恭子 大阪散歩

・大

わたくしのIDカードは通せんぼ天つ隠れ処タワーマンション
 真昼間の闇をうごめく(新世界) 串カツソースはどろりと溜まる
 入れ墨をタトゥーと言いかえ二の腕をひと筆書きの青靨くねる
 闘争の記憶かさねてドヤ街の夜桜ぬらす雨しずかなり
 細道をくだる迷路の泥濘をひよいと跨いでハルカス仰ぐ
 タワーマンションと背中合わせに居酒屋の裸電球ぼんやり灯る
 始まりも終わりもあらずのっぺりと年金暮らしの四月の散歩

高津砂千子 立葵

・風

廿日市の中心部にクマの出でしこと騒ぎになるも姿を消しぬ
 国道を渡りてクマは校庭へよくぞ車にはねられもせず
 体長が一メートルのクマはコグマなり親グマも心配してはおらぬか
 「大丈夫」などとクマには言えざりきわれも病いを持つ身となれば
 買物の途中にちよっとひと休みフジの莢実の垂るる公園
 ゆさゆさとクログアネモチの揺れゆれて夕陽が及びひときわ美しき
 ピンク色の立葵ふわりふわりとて検査を受くるわれをなぐさむ

滝田靖子 里山

・新

丈高き草踏みて行く里山は若葉も木木の吐息も縁
 足元にかサリと小さな音のして顔のぞかせた蛙と目が合ふ
 みづからの命はみづから守るもの日向に長く枝を伸ばして
 先月は裸木だった朴の木今日の緑に歓声あがる
 里山の木木の緑に包まれてわたしも森の命のひとつ
 里山に深く息をして草も木も人も命を交換してゐる
 すかんぼの群落朴の木若葉けやきの森の木漏れ日そして

田土成彦

徘徊

・宙

寝るといふ楽しさ起る喜びのいつれ勝ると言ふこともなく
われのみの空間なれば気兼ねなく言ふ独り言意味はなけれど
夕暮れの小公園をよぎりゆくノラの行き着く先は知らない
怠けつつなにかかんとか生きてます今日の仕事の葉書一行
報道をしなくなつてもなくなつた訳ではないさ例へばコロナ
敵策と言ふよりむしろ徘徊か家の周りを五分一〇分
忘却は時間がつむく恩恵と言ひるし作家は誰か忘れて

田土才恵

鳩待峠

・宙

憧れし鳩待峠に今来たり若くはあらぬこの足に立つ
瑞々し朴の木の葉にふれながらガイドの声の風にまぎるる
ダケカンバ・白樺の林抜けゆけば尾瀬の湿原やがて広がる
沢の水さらさらとゆく雨後の径転ばぬように一歩一歩と
湿原にいつより住める蛙かとその太き声遠近に聞く
八十路過ぎ持ち続けこし夢叶う尾瀬の湿原今歩みいで
木道の朽ちし一部を踏みながらわが人生の一步にゆける

玉井綾子

ステージ4

・羊

三月に検査入院したつきり沖繩復帰記念日に逝く
メニエールと頭椎神経根症の検査履歴にじむ吾のスマホ
無菌室なれば見舞いは叶わずにさくら通りの写メを送りぬ
ステージ4の検査結果にこの春の藤はにわかに色褪せて散る
元気度の証はLINE 既読さえ付けば眠れし晩春の候
疼痛をこらえ進めし暮しまい亡くなる二十日前に済みしと
自らをオープンに語る君なれど誰にも告げぬ名あり、藪の中

中島央子

草の波

・森

五月晴れつやもち豊かな土手の草波のやうなる風のゆく路
潮入りのさざ波見下ろすアーチ橋百尾の鯉の鱗が泳ぐ
誌上より名を見ずなりし友どちの如何にいますや八重雲の空
行動の狭まりし身に届きたる春のファッションカタログ捲る
くれなるに燃ゆる鰯燭の垣に沿ひ上り坂ゆく五月フィナーレ
足指を一本宛まはしめるまだまだ生きる声掛けながら
君子蘭何年ぶりか只一輪まつたり朱色を見せて終りぬ

永田進一

嵯峨野

・山

小倉山背に燕の宙返り保津川の堰に白波のたつ
愛宕山小倉山の名勝地歌湧き出でよ川の流れに
嵯峨野行く竹林続くこの道は君と歩みし遠き日の春
竹林の道に異国の言葉溢れヘジャブの女も笑顔で会釈
縁結びの野宮神社に願掛ける恋の神籤は密やかにこそ
小柴垣外開いにし飯普請黒木の鳥居の野宮神社に
落柿舎や山ふところに草燃ゆる句碑建つ庭の閑かなりけり

永塚節子

雨霧

・銀

何をしつつ過こしし日かえこの花の咲くも知らず散るも知らず
ことごとく閉じ込め広がる霧の中もみじの若葉のひときわ美し
生きながら死後の眼に見つめおり霊園つつむ深き雨霧
霧の中奥へ奥へと去りてゆく等伯の背の見えたるような
立葵五月の風受け揃い踏みわたしの風とほほえみやます
立葵一夜の雨に術もなし地に伏す紅は汚れなきまま
店先に一列縦隊十八尾あたまを揃えきびなご並ぶ

仲西正子 楽園 ・ 沖

連れだちて中空をゆくオオゴマダラのロマン飛行だ三組もあり
てふてふと言うのはたれだ中空にオオゴマダラの急ぐにあらざ
優美なる羽根をひろげて静かなりオオゴマダラと月桃の花
庭隅に呼ぶ声のありよく見れば夫は指差す カマキリの卵
あの頃は七節もいた蜘蛛の巣も傘寿の夫と庭に語らう
澄む空を見上げればなに 音も無く低空飛行で偵察機くる
楽園と訪ねし人ら留めあれ不発弾ある島を踏むとき

中村博子 新聞の記事 ・ 漣

冷泉家の蔵より発見されし宝 定家直筆の「顕注密勘」
古今集の歌の解釈、言葉の意味今に伝える「古今伝授」や
冷泉家に見つかる直筆注釈書歌道の継承「王朝の和歌守」
熱心な学びの跡を残しいし十八世紀の当主・為村
「やまとうたはひとのころをたねとして・・・」冷泉為村の研究ノート
十世紀の勅撰和歌集「古今集」によりて継承されし和歌の道
和歌の家に伝わりし資料あまたなり古今伝授の神髄伝うる

西堤啓子 オコジョ ・ 天

圧縮され切り刻まれた時間から放たれた日は空を見ている
結局はなにを運んでいるのだろう物流センターは長城のごと
湧水の流れに揺れるバイカモは明るい影をはしらせ背い
白きオコジョは山の妖精葉しげに「おや五合目はみぞれになるよ」
ここもまた隆起し陸になったという九十九島は地震の記憶
鳥になり北に旅して俯瞰する佐渡の鳥影 ころろ パランス
コンビニが葬祭場に交わりゆく街を見下ろし宇宙猫飛べ

ぼばりょうこ ゆめの残り火 ・ 鹿

信心の心根のなき我なれど裡なる神に救われてもいる
夜半めざめ夢を反芻しておりぬまことしやかなるゆめの残り火
人は死を指して終りと言うけれど私は知ってる未知の世界への出発と
もう花は咲かぬであろうと嘆きいたれどポツリと一輪くれないのばら
石垣の間よりタンポポ咲きいでて 見てよ見て見ると秋波を送る
やみくもに逢いたくなくなりて途中下車この不意打ちに御夫婦の笑顔
気がつけば三人姉妹もときにされており ケセラセラ・賢夫人型・天真爛漫・の

浜谷久子 黄の花 ・ 地

黄の花を摘めばさらなる花芽吹く冬菜は種へのシナリオ急ぐ
芥子菜はどこからともなくやって来て黄の花咲かせ畑に棲み着く
夏野菜の苗の売り出し評判の出張露店二日間限り
毎年を西瓜の大玉育てあげる細腕名人接ぎ木苗選ぶ
むらさきのミニトマト苗いちばんに籠に納める忘れがちにて
露伸びる季節の便り古民家の友より自慢の佃煮届く
こだわりの佃煮届く毎年をわが家の露はただ伸びるのみ

檜垣美保子 駅 ・ 鳥

日の出前かたちおほろに舟ひとつ人影ひとつ湾にただよう
鳥賊釣りの船は揺れつつひとけなく風の音ばかりの昼の波止なり
代掻きのおわりし田んぼをおもむろに歩きはじめの白鷺一羽
廃駅の錆びたる鉄路は最果てと最果てつなぐときしすけさ
伊上駅ベンチのむこうの深緑にほととぎす鳴く声のみにして
この声が好きと言う友とバスを待つうしろの山にほととぎす鳴く
二度三度尾羽を上下に振る小鳥さよならの合図とおもう日の暮れ

福田庸子

深呼吸

・今

大陸の黄砂の映像見やりつつ萌ゆる日本に深呼吸する
たつぷりと扇状地の田に満たさるる今年の水に安らぎあるを
温暖化を身にまとひたる小賀玉の厚き葉群の照りゆく五月
樹高伸ばしふり注ぎくる甘き香に三十年の時の厚みは
わづか十秒枝に宿りし一滴の背から橙へ移る朝よ
地縛りとはよくぞ名付けし荒畑をおほふ葉のもと伸びる細根は
居ながらに商品届く便利きの裏を支へる人をおもへり

藤田美智子

貧乏くじ

・新

羽ばたかずゆつくりと輪を描きゆく鳶を羨むころに見上ぐ
泣き方にその訴へを知りし日のはるかとなれり若葉風吹く
自らをボクと呼ぶ少女は眩きぬ「信用できる大人はゐない」
樹は樹なりからだを揺すりゐることを知るよしもなし過ぎゆく風は
植ゑられし苗は直線にあらずして迷ふころを見せめることし
悪気なきことばに不意打ち食らひたる夕べほのかな花の香を欲る
貧乏くじといふ言葉は嫌ひほろ酔ひに君と語れば心平らぐ

藤森巳行

ロックで二杯

・銀

地獄には弁護する人居りません獄卒は検事間魔が裁く
秋深く北斗七星仰ぎ見る北極星は真北を動かす
筈と路が我が家に届きたり近所の友と遠くの友より
物価高我の胃袋直撃すモヤシに納豆腐が多し
「風薫る」最初に言つた人凄じい嘆覚ならぬ心覚優れる
糖尿と血圧の薬飲んでても今日も焼酎ロックで二杯
脚痛め寝てゐる我に「死ぬしかないね」愛する夫に言ふ言葉かよ

船田清子

五月の午後

・天

隣家よりニオイバンマツリの香り立ち五月の午後を満たしてやさし
一面の薄雲透かす陽光にまますます盛る五月のみどり
静かなる日本の初夏に連日の殺人情報ノ狂ひしは何？
大量の死者を出せるロシアへと連行されゆくウクライナの孤児
ロシアなる思ひははやも見えみえに、数年後には大戦力と
コロナ経て見なれし商店軒並みに姿はりて「ここは何通りにや」
コロナ経て香を失ひし食品に文句を言はぬ市民の従順

本元由美子

アンニユイ

・岡

生真面目な連れ合ひに添ふわが生活今朝の紫陽花踏ひて只れ
鴨のジュンペリーに群がりて退屈な老いに賑はひをなす
仕舞湯に蛙さまねしく鳴く今宵代満て終へて暖かく浸かりぬ
気紛れのゴリラの「アイ」はつれあひになじか知らねどウンチを糞るる
気紛れの「アイ」の仕種は何ゆゑか不機嫌なわれと同じとおもふ
憂鬱な生きる時間を放漫に散らす夕陽に浮かぶ人影
アンニユイが煮詰まる頃の夕暮れはラクトウイユの鈍き赤色

久我田鶴子

隼風

・羊

隼風のうちにをさまりゐることこのままいつまで ひとつまでも、とや
差し出して得たる平和か密約の密、蜜のごと沖繩に埋め
せんさうに直結せざるを言ひ訳に公然と売る戦闘機さへ
なんとも理由はつけられなめられて唾液まみれの民草の顔
後付けの理由に配備すすめつつすたすたにする沖繩の空
特定のできぬところに動く意志カオナシとなりてちからを放つ
目障りにおもはれるしかとある日のファックス呪ひのごとき吐き出す